

教師海外研修 報告書

独立行政法人 国際協力機構 北陸センター(JICA北陸) サモア独立国



はじめに

この報告書は、2018年度にJICA北陸が実施した「教師海外研修」についてまとめたものです。

「教師海外研修」は開発教育・国際理解教育に関心のある教師及び教育委員会指導主事を対象に実施している国内と途上国での研修です。研修を通し開発途上国の現状、日本との関係や国際協力について理解を深めて頂き、その成果を次世代を担う児童・生徒への開発教育・国際理解教育に役立てて頂くことを目的としています。

JICA北陸では2018年度、北陸地方の小中学校、高校からご応募頂いた9名の先生方にご参加頂き、金沢市での国内研修を経た後に大洋州のサモア独立国で海外研修を実施しました。

サモアは、南国特有の透き通る青い海と豊富な果実に恵まれた自然が美しい国である一方、経済発展に伴い様々な課題に直面しています。大らかな気質や家族・村民間の強い結び付きなど日本人にとって魅力的な側面がある反面、近代化によって変化した食生活がもたらした"土へ帰らない"ゴミの増加、高い肥満率、糖尿病の発生など、サモアでの対策・対応が追い付いていない問題が近年顕在化しています。サモアの「国の発展」の結果生まれてきた課題、そしてこれからの望ましい「国の開発」を様々な側面から学ぶ為、参加教員はJICAの技術協力プロジェクトの現場や青年海外協力隊の活動先、現地NGO、教育省、学校などを視察し、意見交換を行いました。また、サモア人家庭でのホームステイも体験してきました。

そして帰国後は参加教員全員が、国内研修と海外研修で得たこと、学んだことを活かし、国際理解教育の実践授業の計画、実施、結果の共有と改善を繰り返してきました。

2019年2月23日には一般の方々向けに総合報告会を開催し、今年度の一連のプログラムを締めくくりますが、参加教員にはプログラム終了後も開発教育・国際理解教育への継続的かつ果敢な取り組みを期待しています。

今年度このプログラムにご参加頂いた9名の先生方のあふれる熱意と真摯な取り組みに敬意を表するとともに、所属学校の校長先生はじめ関係の皆様のご理解とご支援に心から感謝申し上げます。本書が、開発教育・国際理解教育に関心をお持ちの、または関わっておられる全ての教育関係者の皆様にとり有用な参考の書となることを願っております。

2019年2月

独立行政法人国際協力機構 北陸センター (JICA北陸) 所長 仁田 知樹

目 次

はじめに

研修概要
海外研修報告 · · · · · · · · · · · · · · · · 4
実践授業報告(掲載順番)
1)石川県能美市立辰口中央小学校 田中 陸人 教諭 ましじ海外協力隊! 今、自分にできること。 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
2) 石川県金沢市立小坂小学校 小山 昂志 教諭 Hello おとなりさん! 〜相手を知るということ〜 ・・・・・・・・・・・31
3) 石川県内灘町立向栗崎小学校 細井 啓行 教諭 幸せとは何か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
4) 石川県白山市立蝶屋小学校 北 洋輔 教諭 未来がよりよくあるために 〜自分の良さに目を向けて〜 ・・・・・・・ 55
5) 富山県氷見市立宮田小学校 表 克昌 教諭 未来がよりよくあるために ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
6)石川県白山市立松任中学校 藤田 実代子 教諭 「Share Happy?」〜ともに生きる地球の未来〜 ・・・・・・・・・・ 71
7) 石川県立金沢泉丘高等学校 酒井 智朗 教諭 サモア人の健康のために必要なことは何だろう? ·····112
8) 富山県立富山南高等学校 山崎 里美 教諭 国際協調と国際経済機関 ·····124
9) 富山県立富山中部高等学校 土井 聡 教諭 国際経済の動向と日本の役割 ·····144
JICA 開発教育支援事業案内 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

>> JICAの教師海外研修について

独立行政法人 国際協力機構(Japan International Cooperation Agency:JICA)は発展途上国が抱える様々な問題や課題を改善・解決していけるよう、途上国や日本で多面的に事業を展開している日本政府の専門機関です。

JICAは数多くある事業の一つとして、途上国を含めた海外や国際協力に対する理解を促進するための事業(国際理解教育/開発教育支援事業)を日本国内で子供達や一般の方々向けに行っています。JICA北陸では、開発途上国での実体験型研修プログラムを通して学んだ内容を直接教育現場に還元して頂く「教師海外研修」を、学校教員の方々向けに実施しています。子供達が社会に出る時、身近な地域で外国の方達が住んだり働いたりすることが増えています。"国際理解・国際協力"は自分に関係ないことではなく、知っておくべき身に付けておくべき一般教養となりつつあります。本研修は子供達の世界、視野、可能性を世界に広げるために、まずは教育現場にいる先生たちがグローバルな知識や経験を積むことを目的にしています。

研修の流れ

現地での国際協力活動視察や現地学校訪問、ホームステイ先家族との交流、同じ想いを共有する教員間での意見交換などを通し、途上国の置かれている現状や課題、日本との関係、国際協力の実情について理解を深めます。そして、国際社会の中でこれから生きていく児童・生徒に何を伝えるか、何を学んで欲しいか、試行錯誤しながら授業案を作成し、学校現場で実践していきます。



SDGs: 国際社会が持続可能な社会を実現するため設定した重要な世界共通の目標。 17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。

こんな先生方におススメ!

- グローバル教育、国際理解教育を今後北陸地域で実践し広めていきたい方
- 既に国際理解教育を実践しているが、実体験が十分ではなく教育者として説得力が不足していると感じている方
- 途上国や国際協力についてきちんとした理解や知識を入れ、実体験と合わせて授業をしたい方
- 重要性を増す英語力やESD(Education for Sustainable Development/持続可能な開発のための教育)に加え、 最近教育業界でも取り上げられるようになったSDGs(Sustainable Development Goals/持続可能な開発目標)など を本質的に理解し、また今後のグローバル社会で必要になる国際的な知識や実体験を得たい方
- 教員としてこれからも成長していく為に、国際理解教育について他校の先生達と一緒に学び合いたい方

>> JICA北陸のイチオシポイント

● 本研修では、「国の発展」や「国の課題・問題」「国際協力方法」を多面的に学ぶため、JICAが行っているプロジェクトの現場を訪問するだけでなく、NGOなど他アクターの国際協力現場も訪問します。また、教育面だけに限定せず、環境、医療、ビジネスなど色々な方面からアプローチし、考察します。

「国の発展」「国際協力」を 様々な分野から、 色んなアクターの視点から 学ぶことが出来ます!!

- 海外研修ではホームステイプログラムを入れることにより、現地の方々と交流し普段の生活を実際に体験することが出来ます。そして、日本とは大きく異なる現地の方々の視点、考えも知ることが出来ます。
- 国際理解教育に関心のある、北陸3県(富山・石川・福井)の先生方のネットワークの場にもなります。

応募資格

- 1) 北陸3 県(富山·石川·福井)の国公立·私立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員 (海外研修後、児童・生徒に国際理解教育を継続的に実践できる立場にある教員、本研修の成果を広く他の教員に共有できる立場にある教員)
- 2) 原則として、応募締切り時点で年齢が満50歳以下の方
- 3) 所属する学校の校長もしくは教頭(教育委員会であれば所属長)の推薦を得られる方
- 4) 過去に本研修、JICAボランティア、JICA専門家、ODA民間モニター等、JICAから海外に派遣された経験のない方

参加者一覧(順不同/敬称略)

NO.		氏名		学校名	担当教科 担任学年	県名
1		田中陸人	たなか りくと	│ │ 石川県能美市立辰□中央小学校 │	5年生	石川県
2		小山 昂志	こやま たかし	石川県金沢市立小坂小学校	5年生	石川県
3	小学校	細井 啓行	ほそい ひろゆき	石川県内灘町立向粟崎小学校	5年生	石川県
4		北洋輔	きた ようすけ	石川県白山市立蝶屋小学校	6年生	石川県
5		表克昌	おもて よしまさ	富山県氷見市立宮田小学校	6年生	富山県
6	中学	藤田 実代子	ふじた みよこ	石川県白山市立松任中学校	国語 3年生	石川県
7		酒井 智朗	さかい ともあき	石川県立金沢泉丘高等学校	保健体育 1年生	石川県
8	高校	山崎 里美	やまざき さとみ	富山県立富山南高等学校	地歴公民 2年生	富山県
9		土井 聡	どい さとし	富山県立富山中部高等学校	地理·現代社会 1年生	富山県
10	同行者	武田 さやか	たけた さやか	JICA北陸	開発教育 支援事業	石川県
11	141114	竹本 沙織	たけもと さおり	JICA北陸	福井県推進員	福井県

>> 1年間の流れ & 2018年度の研修日程

国内 事前研修

1回目 2018年6月23日(土)

2回目 2018年7月21日(土)

海外研修にむけた準備

グローバル教育、国際理解、SDGs、JICA、国際協 力、訪問国情報など、訪問する前に知っておくべきこと を学び、また海外渡航に向けた必要準備事項について 共有します。訪問国に派遣されていた元青年海外協力 隊の経験談や過年度参加者との交流もあります。



知識編・渡航準備編

事前研修の様子

実体験編

途上国での研修

海外研修中はJICAの国際協力プロジェクト現場や NGO、青年海外協力隊の活動先などを訪問し、実際 に働いている方々と意見交換を行います。訪問国の 現状、途上国を取り巻く課題などを様々な視点から 捉え、考察します。見学先は訪問国・研修年度によっ て変わります。



訪問した学校で文化紹介をする参加者

海外研修

2018年8月12日(日) ~2018年8月22日(水)

国内 事後研修

2018年9月8日(土)

実践授業

9月~12月

実践授業に向けた準備

海外研修を通じて考えたこと、学んだこと、感じたこ とを参加者間で振返り、整理します。また、自分が立て た授業案をもとに、実践に向けて改善点などを意見交 換し、児童・生徒に何をどう伝えるかブラッシュアップし ていきます。授業に使える国際理解ワークショップも 体験します。

経験整理と授業案作り編



事後研修で意見を発表する参加者

学校で体験・学びを還元

収集したデータや資料、実体験などを活用し、訪問国が抱える課題や国際協力、日本の 役割、異文化について考える授業を9月から12月にかけて実施します。



サモアの衣装を見せる教員



学んだ内容を発表する小学5年生

成果報告編

現在までの学びを一般市民に向けて発表

「どんな国際理解授業を行ったのか」、「その授業を 受けた児童・生徒は何を感じ何を学び、どんな変化が みられたのか」「実践を通じてさらに何を考えたのか」 など国内外での研修の成果を報告します。参集した 方々の質問やコメントもさらに学びを深めます。



全員で現地の民族衣装を着て発表

報告会

2019年2月23日(土)

海外研修報告

研修国概要: サモア独立国

ニュージーランドの北2,300km、ハワイの南3,700km、南太平洋上にある東京都 の1.3倍程の小さな島国。人口は約20万人。国内人口をはるかに上回る規模のサモ ア人がニュージーランドやハワイ等の海外で生活しており、彼らからの海外送金が本 国サモアを支えている。サバイイ島とウポル島というふたつの大きな島とその周辺の 島々で構成されている。国民の9割を占めるのがポリネシア系サモア人。農業と沿岸 漁業を中心とした小規模経済だが、観光と漁業を中心に成長してきた。

日本の経済協力は、1968年に研修員受入事業が始まり、1988年にJICAサモア事 務所が開設。それ以降、本格的な二国間協力が推進されている。基礎教育、保健医療、 防災など、JICAは様々な分野でサモアに対して支援を行っているが、近年は環境分野 での支援に力を入れている。その理由として、生活の近代化に伴い、これまでにはな かったプラスチックなどのごみが増えているものの、最終処分場が十分に整備されて いない為、ごみの処理能力や分別が追い付いておらず、廃棄物問題が顕在化している ことがあげられる。ごみの減量化や適正処理が課題となっており、JICAはサモアで「大 洋州地域廃棄物管理改善支援プロジェクト」を実施している。





	基礎データ
面積	2,830平方キロメートル(東京都の約1.3倍)
人口	約20万人(2017年、世界銀行)
首都	アピア
民族	サモア人(ポリネシア系)90%、
	その他(欧州系混血、メラネシア系、中国系等)
言語	サモア語、英語(共に公用語)
宗教	キリスト教(カトリック、メソジスト、モルモン教等)
政体	選挙により国家元首を選ぶ制度
GNI	1人あたり4,100米ドル(2017年、世界銀行)
経済成長率	2.5%(2017年、世界銀行)
失業率	8.2% (2017年、ILO統計)
	* 特に注がない場合は外務省ホームページをもとに記載。

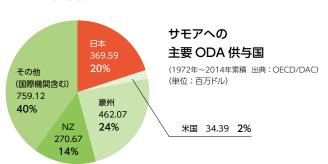
	略史
1722 年	オランダ人探険家Roggeveen が視認
1768 年	フランス人航海者Bougainvilleが上陸
1860 年代~	アピアが捕鯨船補給港として繁栄
	ドイツ、英国、米国が勢力を競う
1899 年	ドイツが西サモア(現在のサモア独立国)、
	米国が東サモア(現在の米領サモア)を領有
1919 年	ニュージーランドを施政権者とする
	国際連盟委任統治領となる
1945 年	国際連合信託統治領となる
1962年1月1日	独立(但し独立記念日は6 月1 日)
1997 年	国名をそれまでの「西サモア」から
	「サモア独立国」に変更

援助実績

372-737 3173					
スキーム	額(累計	h)/人数(延べ)			
有償資金協力	45.98億円	(2016年度までの累計)			
無償資金協力	326.36億円	(2016年度までの累計)			
技術協力	144.45億円	(2016年度までの累計)			
青年海外協力隊	540人 (20)18年12月時点で26人派遣中)			
シニア海外ボランティア	133人 (20)18年12月時点で 1 人派遣中)			

サモアへの援助総額は2016年度までに累計516.8億円

出典:外務省ホームページ JICA海外協力隊ホームページ



サモアと日本の比較

	サモア	ランキング	日本	ランキング
平均寿命	75歳	<u>89位</u> 203ヶ国	84歳	3位 203ヶ国
1人当たり 名目GDP	US\$4,258	<u>110位</u> 192ヶ国	US\$38,449	<u>25位</u> 192ヶ国
乳児死亡率 (1歳未満)	14.20 人 /千人	<u>94位</u> 193ヶ国	1.90人 /千人	<u>3位</u> 193ヶ国
65歳以上 人口比率	5.61 %	<u>107位</u> 194ヶ国	27.05%	<u>1位</u> 194ヶ国

【データ出典】(データは同じベースで比較する為、同じ年度で比較しています)

- ◆平均寿命:世界銀行 2016年
- ◆1人当たり名目GDP: IMF 2017年 ◆65歳以上人口比率: 世界銀行 2017年 ◆乳児死亡率(1歳未満):世界銀行 2017年

人的つながり

	• •
項目	人数
サモアにおける	86人
在留邦人数	(2017年10月時点 外務省ホームページ)
在日サモア人数	69人 (2017年6月時点 法務省登録外国人統計)
サモアから日本への	12名
留学生数	(2015年5月時点(独)JASSO調査統計)
日本からサモアへの	688人
観光客数	(2010-2014年 日本政府観光局統計)

》)2018年度 JICA北陸 教師海外研修日程

日程 時間		時間	項目	紹介ページ																			
1	8/12	В	PM	小松空港→成田空港 成田空港18:30出発																			
2	8/13	月	PM	ニュージーランドのオークランドを経由し、サモアの首都アピアに到着																			
3	8/14	火	AM	JICAサモア支所 訪問 ・サモアでのJICA事業 概要紹介 ・サモアでのJICAボランティア事業 説明 ・サモアの教育制度、文化について紹介 ・ホームステイガイダンス	6																		
				JICA技術協力 視察:タファイガタごみ処理場を訪問	7																		
			PM	JICA専門家 活動先視察:科学研究機構(SROS)を訪問	8																		
				サモアの伝統的な踊りを鑑賞(フィアフィアショー)																			
			AM	青年海外協力隊 活動先視察①:フィアマラマラマ(障碍児者施設NGO)を訪問・交流	9																		
4	8/15	水		在サモア日本大使館 表敬訪問	10																		
			PM	青年海外協力隊 活動先視察②:サモア国立大学 日本語クラスを訪問・日本文化紹介	11																		
			木	木	木		青年海外協力隊 活動先視察③:ファガリー小学校訪問・日本文化紹介	12															
		3/16 木				木	木	木	木	木										AM	青年海外協力隊 活動先視察④:サモア国立博物館	13,14	
5	8/16											教育省訪問	15										
								青年海外協力隊 活動先視察⑥:柔道協会NGO訪問	17														
_	0 /17		AM	青年海外協力隊 中間報告会 参加(含 意見交換)	18																		
6	8/17	金	PM	青年海外協力隊員との懇親会																			
7	8/18	土	終日	農村でホームステイ	19																		
8	8/19	В	終日	農村でホームステイ、成果報告会へ向けて準備	19																		
			AM	サモアでの研修成果を発表	20																		
9	8/20	月	DAA	市内観光																			
																	PM	サモア支所スタッフとの懇談会					
			AM	市内観光																			
10	8/21	火	PM	サモアの首都アピアからニュージーランドのオークランドへ移動 オークランドで一泊																			
1.1	9/22	مار.	AM	オークランドから日本へ移動																			
11	11 8/22	8/22 水	PM	成田空港を経由して小松空港着 19:55																			

JICAのお仕事って? in Samoa

研修日	1⊟目 8月14日
訪 問 先	JICAサモア支所

現地に滞在している職員さんから、改めてJICAサモア支所が行っている取り組みについて話を聞くことができた。

まずは、JICAサモア支所が行っている二国間援助の内容について。日本とサモアをつなぐ架け橋として、サモアの経済発展や日本に対する国際理解が促進されるよう、日々様々な事業を展開している。今まではインフラ整備や一次産業支援が中心だったが、現在では教育分野などソフト面へ支援がシフトしているそうだ。また教育については、教員が足りていないエリアにおいては、マンパワーとして日本式の教育を導入したいという要望が大きくなってきていることを知った。

次に、支援事業の規模について。日本がサモアに対して行っている支援、そのほとんどが「無償」であることが何よりも驚きであった。数千万円という単位の支援ではなく、何億円、何十億円という単位のお金がサモアの発展のために投入されている。そのおかげで、島には港ができ、小学校が建てられ、様々なハード面が整備されてきている。実際に、日本によって建てられた建物を訪れると、日本の国旗が壁に描かれており、日本の支援を実際に目で見ることができる。また、そこで働くサモア人の方に話を聞くと、"Thanks for JICA"という言葉も聞かれ、それは日本人として誇りに思える瞬間であった。

他にも様々な取り組みについて話を聞きくことができ、支援の重要性、さらには必要性について改めて感じることができた。日本という先進国の視点から、サモアという発展途上の国へどのような支援ができるのか考えることが先進国としての使命なのだとも思った。

だがしかし、もう一方の視点として「支援してもらっている」状態からサモアが「独自で発展できる」ように、支援の量を減らしていくことも考えなければいけないと学んだ。助けてもらって当たり前、助けがある前提で予算を組む、など依存傾向にあることも事実。サモアという国が独自で発展するために、「持続可能」というキーワードをもとに、今後の研修を見ていくことを考えた。

記 小山 昂志 (石川県金沢市立小坂小学校)



サモア支所で職員の話を聞く参加者

サモアのごみ問題

研修日 1日目 2018年8月14日

訪 問 先 タファイガタごみ処理場

サモアの海はとてもきれいである。まさに、ダイヤモンドの輝きだ。サモアの空は美しく、透き通った青い色をしている。そして、サモアの人々は口々に故郷の自慢をする。「サモアは美しい国だろう?」と。確かにその通りだし、私もこの国の海を見たとき、本当に言葉を失うくらいに感動した。しかし、現実はちょっと違う側面もある。

実は、足下に目を向けると、道端には大量のごみが落ちている。これは、首都のアピアだけかと思いきや、我々がホームスティを行ったアウファガ村でも同じ状態であった。実はサモアでは、町中どこへ行ってもポイ捨てだらけなのである。

これには理由があり、まずはそのことについて説明をしていただいた。タファイガタごみ処理場でJICAの専門家として技術支援をされている尾上さんから「これはサモアの食文化の影響が大きい」という話を聞いた。

そもそも、サモアでは昔から現在まで、主な食生活はあまり変わっていないらしい。島に宿る木の実や魚、いもなどを中心に今も食文化を築いているということだ。ホームステイ先の、各家庭の庭にも、バナナやココナッツなどの木がたくさん生えており、彼らは今でも大半のものは自給自足できる生活をしているということはすぐに分かった。そうした自給自足の中で食べている、バナナやココナッツ、魚などは、自然そのものが素材なので、いわゆる「ゴミ」が発生しない。食べかすも、食べられないものも外に捨てておけば、犬や豚や虫がそれを食べ、いずれ自然に還るからだ。こうした考え、行動は、サモア人の食文化として根付いている。つまり外にごみを捨てることは、彼らにとって常識だったそうだ。

ところが、サモア人の生活は近代化と共に変化し、様々な加工品も手に入るようになった。ココナッツのジュースはペットボトルや缶のソフトドリンクに変わり、果物は袋に入ったお菓子や、カップ麺に変わった。それでも、空き缶やカップ麺の容器は、彼らにとって「食べかす」「食べ残し」となんら変わらない位置づけなのだ。「捨てれば自然に還る」それが身についてしまっている以上、なかなかスタイルを変えることができず、ごみを当たり前に捨ててしまうのだそうだ。

こうしたサモアの現状をなんとかしようと戦ってきたのが、今回訪問させていただいたタファイガタごみ処理場のサモア人スタッフたちである。実は、サモア人の出すごみは年々増えているそうだが、焼却の設備は十分ではなく、ほとんどを埋め立てに回すしかない状況になっている。また、島内では缶のリサイクルはできず、現在は輸出し、他国に買ってもらうという方法で処理を行っている。島内のごみ問題はかなり深刻な状況と言える。現状を改善するため、スタッフの方たちは、ポイ捨てはもちろんのこと、島内で発生するゴミの量を減らすために、国民に呼び掛けをし続けている。

またJICAが中心となって「J-PRISM」という取り組みを行い、同じ悩みを抱える太平洋の島国が力を合わせ、共同でゴミを減らしていく取り組みも行われている。さらに、同じような面積の島である沖縄の技術支援を受けながら、島内のごみ処理の制度を整えていく試みもある。そのうえ、スタッフの話では、今後島内でのプラスチックを禁止する声も上がっているということだ。自分たちの島を守るために、スタッフたちはJICA専門家と力を合わせ様々な活動に取り組んでいる。

スタッフの方は「それでも、このままでは島にごみを捨てることができなくなる日が来るかもしれない。町のポイ捨てもほとんどなくならないのが現状だ。」と語っていた。やはり、数百年にも及ぶ文化はそう簡単に変えられるものではなく、現状はもぐらたたき状態で、なかなか効果は出ていないそうだ。それでも、スタッフの皆さんは諦めない気持ちを全面に出していた。

私たちも、同じ島国に住むものとして、これらは真剣に考えるべきことである。日本はサモアよりは広い国だが、必ずどこかで限界に達する日は来るだろう。我々は先進国であり技術提供をする身であるが、ここまで真剣に国の環境について考えてきただろうか。タファイガタのスタッフの努力している姿からしっかり学び、我々も未来に目を向けて考えていかねばならない。

記 北 洋輔(石川県白山市立蝶屋小学校)



サモア人スタッフによる説明



JICA専門家から説明



ごみ処理場のごみ山

サモアの農作物を科学の力で加工品に!

研修日	1⊟目 2018年8月14日
訪 問 先	科学研究機構(SROS)

科学研究機構は、日本をはじめ、中国や、オーストラリアからの支援を受けている施設である。JICA専門家の坂本賢二さん(科学)の助言を受け、サモア人の科学者たちがここで働いている。ここでは、サモアの農作物を原料とした製品の研究開発、製品に含まれる物質の検査、農作物や土壌に含まれる栄養の分析などを行っている。特に印象的だったのは、加工品の研究開発である。健康によい物質に着目し開発した健康食品や海外に住むサモア人向けの加工食品など、サモアでとれる農作物の良さを生かした加工品を見ることができた。科学の知識と豊かな発想をもつ坂本さんの適切な助言を受け、科学者たちは生き生きと仕事をしていた。また、坂本さんに対する科学者たちの信頼も大変厚いことが伝わってきた。

一方で、加工品にするために農産物の生産を増やしてはいるが、十分な量を確保できないという現状も分かった。加工製品 を開発・商品化し利益を得ていくためには、サモアの農業生産の振興が大きな鍵だと感じた。

記 田中 陸人(石川県能美市立辰口中央小学校)



サモア人スタッフから説明



開発中の商品について専門家から説明

子どもたちの笑顔!!

研修日 2日目 2018年8月15日

訪問先フィアマラマラマ(障碍児者施設NGO)

バスで町を走り、しばらくすると学校の看板を見つけた。そして、中に入るとまず飛び込んできたのは平屋の校舎であった。 日本の校舎とは似ても似つかない風貌に、バスに乗り込んでいる参加者から「うわー!」と驚きの声が聞こえた。しかし、それは 日本が優位でサモアが劣っていることへの驚きなのではなく、現地の文化を目の当たりにした、どちらかというと新しいこと が知れるうれしさのような感じであった。子どもたちが居る校舎は、ガレージのようになっており、そこには6歳から23歳まで の年齢の離れたたくさんの子どもたちがいた。

私たちの挨拶を済ませると、いつもの授業風景を見せてくれた。授業といっても、算数や国語をするのではなく、主にダンスや歌を取り入れた楽しいものであった。また、動物や生き物の写真からどんな動きをするのかマネをする時間などもあった。そこにいる子どもたちは、自ら手をあげて演じることを立候補するのである。そして、演じる者を見てみんなで大盛り上がり。ライバル意識を燃やしてさらに激しいマネをする強者が登場することもあり、なんとも言いがたい一体感がそこにはあった。

私が大学時代に行った特別支援学校での実習の際、その学校の校長先生が次のようなことを言っていた。「特別支援は教育の原点である」と。その言葉が、サモアの子どもたちを見ていてふと頭に思い浮かんだ。なによりも、楽しそうにしている子どもたち。将来のために、付けなければいけない力を明確にして授業を行っている日本の姿とはあまりにもかけ離れていた。

参観の後、校長先生やスタッフさんと話をする機会をいただいた。そこでは、障碍者に対するサモア国内の偏見の話をしてくださった。身体障害を持っている人は、受け入れられる傾向にあるが、目に見えない障害としての知的障害は健常者と比べられることが多いという。また、受け入れられているとしながらも、保護者としては自分の子どもに障害があることを認められず、人目につかないように家に隠すこともあるという。そういう意味では、この施設に来ることができる子どもたちは幸せだと仰っていた。

学校内の生活だけを考えている訳ではなく、社会との接続についても言及されていた。職業訓練を授業の中に取り入れ、働くためのスキルを身に付けさせることもしており、数人ではあるが、その成果から就職につながったという。近年は、段々と特別支援の分野でも、社会との接続を考える教育者が増えているそうだ。日本の教育現場でも、今の学習がどう社会に役立つのか、という視点から実践を行うことが求められている。先生は卒業すると居なくなる、親もいつまで元気か分からない。そうすると、自分の力で生きていかなければいけない将来は誰にでも必ずやってくる。国は違えど、子どもたちへの願いはみんな同じで、するべきことも同じ。しかし、社会のしがらみや、引き継がれてきた文化によってスムーズに遂行されないことがあるのだと、この施設訪問で強く感じた。

記 小山 昂志 (石川県金沢市立小坂小学校)



ゲームを楽しむ子供たち



校舎





施設でのハンドベル演奏

日本のお土産に興味津々

サモアの、サモアによる、サモアのための支援

研修日	2日目 2018年8月15日
訪 問 先	日本大使館

サモア日本大使館を表敬訪問し、青木大使、岸参事官と意見交換を行った。

人口19万人のサモアは多くの食料を輸入に頼っていること、貿易赤字は3000万円にのぼっていること、このような国を支えているのが、14万人の出稼ぎ労働者の送金だと青木大使から教えて頂いた。26年前には日本の矢崎という自動車関連の企業が設立され、ピーク時には3800人の従業員を抱えていたそうだ。

参加教員の中からは、長年に渡り日本が無償で支援をしてきているが、日本の民間企業がサモアに入ってきて、産業を活性化することはできないのかという意見も出た。これに対し、人口約20万人規模の島国において、民間企業が利益を上げて継続的にビジネスをすることは困難であるという説明を受けた。また、家族や地域のつながりを大切にする民族性の面から、サモア人による産業の活性化には困難があると感じた。

岸参事官からは、一年中温暖なサモアではココナッツやパパイヤ、バナナなどの食べ物がどこでも手に入るため、絶対的 貧困の人はいないという話を伺った。飢え死にするような貧困はないが、20万人という国民数で一国を運営していくには困難が多いということだった。長い間、植民地支配を受けた歴史から考えると、自分たちの力だけで高度な技術を持ち、このグローバルな社会に仲間入りすることは難しいのだと分かった。

しかし、海底ケーブルがつながり、通信産業において、ビジネスチャンスも広がっている。資源や人口が少なくても、情報ビジネスにおいてハンディキャップはほとんどなく、サモアにとって重要な産業の一つになる可能性があると感じた。

今回の大使館訪問で、日本から遠く離れた全く別の国、全く別の民族という意識ではなく、日本とつながっているところとして、日本人との共通点や同質性に着目する大切さに気付いた。サモアでサモア人を雇用し日本製品を作っていた矢崎総業は、「顧客クレームゼロを達成したのは、従業員の努力だけでなく、地元の酋長、サモア政府、サモア国民、自動車メーカーとの強い絆があったから」だと考えたそうだ。日本と同じ製品を輸出することに貢献してもらったとの感謝の気持ちから、基金を設立し、サモアの子どもたちへの奨学金給付と起業家を支援するための助成を始めたそうだ。

経済発展=幸せではなく、その国の人々が大切にしているものを守り、その国の人々が望む支援をしていくことが重要だと理解することができた。矢崎総業の取組は、まさにその国の人々の立場に立った支援だと思う。幸いなことに、サモアには多くの子どもや若者たちがおり、国外で学び活躍している人が多い。そんな、サモアをよく知りサモアを愛する人たちが、サモアをもっと幸せにできる可能性を持っているはずである。私たちがしなければならないのは、「サモアの、サモアによる、サモアのための支援」のお手伝いなのかもしれない。

記 細井 啓行(石川県内灘町立向栗崎小学校)

サモアにおける日本語教育

研修日 2日目 2018年8月15日

訪問先 サモア国立大学

・ 訪問先でのプログラム内容(概要)

JICAボランティアの活動を視察するため、サモア国立大学を訪問した。大学では佐藤隊員による日本語の講義を参観し、参観後には大学生に対して研修参加者より日本の文化紹介を行った。日本の紹介では、日本に関するクイズを出題し、また日本の歌「上を向いて歩こう」を披露した。日本に関するクイズでは日本の地理や文化、漢字、スポーツ、オリンピックなどについて出題した。また、文化紹介後にはサモアの大学生より歌のプレゼントを頂いた。

訪問して学んだこと

JICAの活動により、遠い異国の地であるサモアにおいても日本語教育がなされていたことに驚いた。今回参観したのは平仮名、片仮名の講義であったが改めて日本語を学ぶ難しさを知った。「ソ」、「ツ」、「シ」など当たり前に利用している言葉を自然に見分け、使い分ける力は本当に凄い力だと気づいた。

日本語を学び始めたきっかけを大学生に質問したところ、アニメだと教えてくれ、日本のアニメ文化の偉大さを感じた。しかし、多くのサモア人は日本語よりも中国語を選択して学んでいることを知った。これは、空港を始めとしてサモア国内に中国の影響が強くあることが大きな要因として考えられる。これからのグローバル社会に向けて中国語は世界的に魅力的な言語なのかもしれない。日本もサモアに対して多くの支援をしているが、サモア人にとっての日本は中国に勝る魅力はないのかもしれない。

・個人の考察

日本の文化紹介のクイズでサモアの大学生が全員無邪気に手をあげてクイズに参加する姿勢が非常に印象的であった。 この活動を通して更に日本に関心を抱いてくれればと思う。大学生全員がそれぞれに夢を持ち、日本に1度は行きたいと語ってくれた。また、「上を向いて歩こう」を披露した後に、即興で歌を披露してくれた。このような姿勢にサモアのすばらしい人間性が表れているように感じた。日本の若者が他国からの訪問者に対して即興で対応できるか疑問である。日本の教育は良くも悪くも他人の目を気にしてしまう文化である。この訪問はそういった文化の違いを感じ考えるきっかけになった。

記 酒井 智朗(石川県立金沢泉丘高等学校)



サモア人学生による即興の歌披露





上:日本の文化紹介/下:漢字紹介

西洋化は「not good anymore」

研修日	3日目 2018年8月16日
訪問先	ファガリー小学校

現地の先生方や青年海外協力隊員、子ども達が笑顔で出迎えてくださった。校長先生に挨拶した後、三々五々、分かれて授業に自由に参加させていただいた。私が参加したのは2年生の算数のクラス。2年生の子ども達に混じって長方形の周囲の長さを求める授業を受けた。足し算するときに歌う、数をかぞえる歌は、昔からある「かぞえ歌」らしい。昨日訪問した障碍者支援施設で教えてもらった歌のリズムと同じだった。歌を利用しながら、英語とサモア語の両方を上手に使って、全員でリズムよく算数の授業が行われていた。教室の壁面には特に算数の学びの足跡がたくさん掲示されていた。また、子ども達は算数の問題を解いたノートも見せてくれた。初対面の外国人の私たちに対して、過度な自己主張はせず、照れくさそうに笑いながら親しみをこめて距離を縮めてくる子ども達の様子がとても純朴に感じた。ちなみに、司書教諭の立場から教室を見たとき、英語の絵本が十冊程度しかなかった。図書は他の国のボランティアが支援しているということだった。

その後、別室に移動し、校長先生をはじめ、教員の方々と意見交流会をもつことができた。私たちの人数を数え、足りない分の椅子を運んでくれたのは男子生徒たちだった。予定時間を超過するくらいたくさんの質問があったが、一つひとつ丁寧に答えてくださり、感謝である。

最後に、全校の子ども達が集合したところで、私たちが歌とヨサコイソーランを披露した。ヨサコイソーランは子ども達も知っていた。元気いっぱいな子ども達と一緒に踊ることができた。準備していた「日本の小学校紹介」や「縄跳び」「昔の遊び」を一緒にしよう!ということはできなかったがそれだけでも充実した時間だった。子ども達や先生方ともっともっと話をしたかったので立ち去るのが名残惜しかった。最後の一瞬まで、子ども達の笑顔が非常に印象的だった。

サモアの学校には公立、私立、ミッションの三種類がある。ファガリー小学校は公立校である。この学校では、以前は5教科 (英語、算数、サモア語、理科、社会)教えていたそうであるが、今は7教科(+美術、体育)教えているという。1日3~4教科、5 教科の日もある。正直なところ負担だが教育省の方針に従ってやっていると校長先生はおっしゃっていた。

「昔と今とで変わったことは何ですか?」という質問に対し、昔はお金がなかったので、自然にあるものを使って教育をやっていたため制約があった。しかし、今は、機材も充実し、隊員の配置によって変わってきた。今、2つあるスクリーンは毎朝使っている。特に理科と算数で使っている。新カリキュラムの学習ができるビデオを映している。書くのが苦手な子どもやスローラーナーに対して、図や絵や写真を使えるというメリットがあるという。

「経済が発展し、教育も変革してきているが、教育の中で変えたくないものは何ですか?]という質問に対して「文化」「伝統」を守りたいとおっしゃった。変えたくないものは、例えば、伝統的な歌、踊り、年長者を敬う文化、伝統的な楽器、お葬式のやり方、ライフスタイル、お客さんを歓迎するカヴァセレモニー、伝統的な服装、サモア語、サモア人のアイデンティティーなど。学校では伝統文化を教える時間も取っているそうである。住まいや暮らしが西洋化されてきているがそれは「not good anymore」だといっていたのが大変印象に残った。その一方で、校長は「ラップトップパソコンがほしい」「これからも支援を続けてもらえるよう願っている」と言っていた。あわよくばという期待やもらって当然という依存。私は初めて「支援慣れ」という言葉も耳にした。このように、支援に頼りつつも、他方で「サモア」らしさを守りたいと願うサモア人。一見、矛盾しているように思えるが、過去において、いくつもの国がいろいろな方法や形式を「これが一番だ!」と持ち込んできた背景があるため、サモアにとって「西洋化は『not good anymore!』」これは本音だと思う。

この学校での見聞を通して、その国が自立するということを目標として他国はどのような支援ができるのだろう?と考えてみた。そしてハッとした。そんな国づくりは、教育のあり方・人の育て方と同じではないか、と。人を育てる最終目標は「自立」である。真に「自立」をした人間を育てるために、どんな方法があるのだろうか。その生徒自身が持つ可能性という種をどうすれ

ば花開かせられるか。それと同じように、その国にあるリソースに注目し、どう高めていけばよいか。真に「自立」した国に育て るために、どのような支援や方法があるのだろう。この日はじめて「サモア側に立って考えてみる」ことができたように思う。と 同時に、大きな宿題をもらったように感じた。「自立」を目指す支援のあり方や方法について、これからも考えていきたい。

最後に、現地の先生が、青年海外協力隊で来る日本人の女性の先生の素晴らしいところは「個々の生徒に対して励ましをす る点」「コミットメントする力」とおっしゃっていた。日本人同士だと気づきにくい日本の教師の良いところにも気づかせてもら えたように感じている。

記 藤田 実代子(石川県白山市立松任中学校)







椅子を運んでくれた男子生徒

算数の掲示物







校長先生を囲んでの交流会

持続可能な援助とは?

研修日 3日目 2018年8月16日

訪問先 サモア国立博物館

・ 訪問先でのプログラム内容(概要)

学芸員の慶野(けいの)青年海外協力隊員に施設内を案内してもらった。博物館は、2階建てとなっており、5つの展示室 から構成されていた。2階へ上がる階段の壁面に、サモアの歴史が写真で紹介してあり、スペースを上手に活用していた。 展示室では、サモアの歴史が年代ごとに展示してあったり、企画展の作品が掲示してあったりした。また、サモアの木々を紹介 するのに段ボールを利用する工夫が見られた。さらに、サモアの伝統的な踊りを取材し、映像として保存している取り組みも あった。

後半は、会議室に移動して、説明を聞いたり、質問をしたりした。学校に出向いて出前授業を実施し、伝統的なデザインを子 供たちに学んでもらったり、トークセッションを行って博物館の活動を広めたりと積極的に活動している様子が分かった。

訪問して学んだこと

ボランティアは、よくマンパワーとして活用されるという話を聞いた。つまり、人的な補充の意味が強い。そのため、ボランティアの人が帰国してしまうと現地の取り組みも終了してしまうことが多いと聞いた。しかし、慶野さんは、違った。

- 1 まず、強制的に文書などで提案せずに、日常の会話の中で企画について提案する。つまり、押しつけにならないよう、普段のコミュニケーションを通してスタッフの雰囲気をつくる。
- 2 その中で醸成された企画を現地スタッフと一緒に行う。その企画を成功させることで、現地のスタッフに「こうやればできる」 「企画することって楽しい」という体験をさせる。そうして、現地スタッフに経験と自信を与えることで、次も自ら企画しようとする意欲を育てていた。まさに、ウィン・ウィンの関係だ。

・個人の考察

国立の博物館だというのに、2階建ての小さな博物館だった。サモアという国の歴史から考えても、開発途上国という観点から考えても、ここでは博物館という施設は馴染みにくいのか、と感じた。しかしながら、慶野さんは、限られた予算、人材の中で、段ボールを使って掲示したり、企画展を成功させたり、収蔵品を整理したりと自分の出来る範囲で国の将来を考えた取り組みをしており、非常に感動した。また、小学校で出前講座を行い、伝統的なデザインを学習する機会を提供していた。教育という見地から、今後のサモアを担う子供たちへの取り組みは非常に有意義であると感じた。淡々と冷静な中にすごく先見性をもち、戦略的なボランティア活動をしていると感じた。

記表克昌(富山県氷見市立宮田小学校)

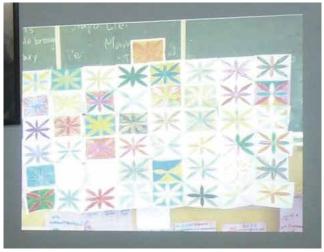




ワークショップ開催



段ボールを使用して展示物を作成



子供たちが描いた伝統的な柄



協力隊員による説明

「サモア式」の教育

研修日 3⊟目 2018年8月16日

訪問先 教育省(MESC)

この日はタイトなスケジュールの中、40分ほど教育省のジェニーさんからサモアの教育の現状について話を伺った。ジェニーさんはとても寛大な心を持った方で、私たちの意見に熱心に耳を傾けて下さった。

自己紹介を一人ひとり行った後、教育という同じ分野で働く私たちにいくつか質問が投げかけられた。サモアの教育の印象や、意欲的に生徒や教員が学習に取り組み続けられるアイディアはないかといった内容だ。私たちは午前に訪問したファガリー小学校での視察をもとに、子ども同士の教え合いや、大学による研究授業、教員間の研究授業、職業体験など様々な内容を提案した。

意見交換をする中で、現在のサモアの教育における問題点は①教員の質が低いこと②ニュージーランド式カリキュラムを導入していることによるドロップアウト、の大きく2つに分けられることが分かった。JICAをはじめとする様々な機関から支援を受け、それらの改善を行っているが、各国から提案される教育制度とサモア人の国民性やサモアの教育現状がマッチしている訳ではなく、まだサモア人と現状に馴染むサモア式教育制度は確立していないのが現実である。そんな中でジェニーさんは、「知識を持つだけでなく、人前で自分の言葉で話せる、自分で判断できる子を育てたい。それが良いサモア国民になることにつながると思う。」と語ってくれた。私は早急にサモアに合った「サモア式」教育制度を見つける必要があると感じた。

ジェニーさんがしきりに話題としていた教員の質の低さについては視察先の校長を見て感じることができた。視察先でのJICAの支援は、マンパワーとしての需要が大きく、持続性を感じることができなかった。いくら各国が支援をしたところで、受け取る側の姿勢が整っていない限りそれは一時的な結果で終わってしまう。ジェニーさんが考えている様に教員の意識改革が必要であると全員が危惧するように現場に落とし込む必要があるが、そこが難しいところなのだと実感した。教育省は子供たちの学力が低い事を問題視していたが、私は現地の子どもたちの学ぶ意欲を強く感じた。現在のカリキュラムを使うにしてもまだ改善の余地があると感じられた。サモアのゆったりとした国民性を見る限り、詰め込み式の現カリキュラムより、日本式の底上げのカリキュラムの方が合っている気がした。だからこそ、制度が変わればサモアの子どもたちの可能性もまだまだ広がるのではないかと思う。

記 山崎 里美(富山県立富山南高等学校)



サモアにおける医療の現状 ~国立腎臓センターにおける人工透析、保健指導の実践を見学して~

研修日 3日目 2018年8月16日 訪問先 国立腎臓センター(NATIONAL KIDNY FOUNDATION)

国立腎臓センター(NATIONAL KIDNY FOUNDATION)は、人工透析を行うための、国立の医療施設である。人工透析は腎不全を患った患者が尿毒症になることを防ぐための医療行為であり、サモアでは2005年にわずか5人だった当センターの透析患者は、現在では160人以上に増加している。

サモア国民のおよそ9割が肥満ともいわれており、街を歩いただけでも、その多くを実感することができる。肥満は高血圧と常に同居しており、腎臓に与える負担は自然と大きくなる。当然、彼らの食生活にその原因を見出すことになる。輸入食品や簡単に調理できる揚げ物などが常食とされ、それらに多量に含まれる塩分、油脂分が腎機能低下に大きく影響している。また、不要なカリウムが体内に蓄積し、不整脈などの原因になるというが、サモア人が大好きなタロイモには多量のカリウムが含まれるということだ。

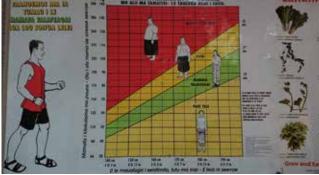
対策があるとすれば、1つは病院を増やすこと、もう1つは健康や食事に関する啓発活動を気長に行うことだろう。あらゆる支援において、その有効性を得るためには「金」と「時間」がかかり、「人」が必要だということだ。現状では途上国に対して様々な支援活動が行われているが、命を守るということが第一義であるとすれば、医療や健康に対する継続的な支援は優先順位が高くなるはずであろう。

今回お招きいただいた国立腎臓センターのクリスティーナCEOと、当地で栄養士として活躍する大山由佳隊員の奮闘に、 改めて敬意を表したい。

記 土井 聡 (富山県立富山中部高等学校)



国立腎臓センター



肥満の指標



腎臓センターを視察

サモアにおける柔道普及活動

研 修 日 3日目 2018年8月16日 訪 問 先 柔道協会

・訪問先でのプログラム内容(概要)

JICAボランティアの活動視察として、上林隊員による柔道指導を見学した。研修参加者6名は見学するだけでなく柔道に取り組むサモア人と共に実際に柔道を行った。柔道の練習後には、リオ五輪に出場したデリックさん、上林隊員と研修参加者で話し合う機会があり、サモアにおける柔道について教えて頂いた。

訪問して学んだこと

サモアではおおよそ20名程度の人が柔道に取り組んでおり、普及を目的としたキッズクラスと強化をメインとしたシニアクラスがあった。シニアクラスの指導は上林隊員が行い、キッズクラスの指導をデリックさんが行っていた。ただ普及するだけではなく、ボランティア派遣がなくなる今後を見据えて、現地の指導者育成も同時に進めている活動であった。柔道に関してはボランティア派遣がなくなった後もサモアの中に残り続ける可能性が高いと感じた。

・個人の考察

まず、このサモアという国において柔道という日本のスポーツが少しずつ広がっていることに驚いた。これは、今までの隊員の努力の賜物である。さらに、ただ普及するだけでなく、柔道指導が今後も継続されていくよう指導者育成をされていて素晴らしいと感じた。

また、この視察ではスポーツの力を実感した。お互いに初めましてで、言葉もあまり通じない中でも、ともに身体を動かしていると不思議な一体感を感じた。自然と仲良くなれていくスポーツの素晴らしさを感じた。

しかし、様々なサモアの視察を通してJICAの派遣としてそもそも柔道の普及が優先されていることには謎が残った。今後もサモアで柔道が発展してほしいという思いはあるが、肥満率が8割、糖尿病患者も5割存在するといわれるこの国には柔道よりも一般的な運動プログラムを広める隊員が必要ではないかと考えた。本当に必要な支援は何か、考えるきっかけとなった視察であった。

記 酒井 智朗(石川県立金沢泉丘高等学校)









サモアで柔道を教える隊員と一緒に

悩み、苦しみ、もがきながらの協力隊活動

研修日 4⊟目 2018年8月17日

訪問先 JICAボランティア中間報告会

サモアで活動する青年海外協力隊員の内、最初の1年間の活動を終えた隊員達が現在までの取組や成果、課題、今後の見通しを報告する中間報告会に参加させてもらった。学校教育、保健、PCインストラクターなどの分野で活動する、9名の協力隊の方々の発表を聞いた。

任地で自分の活動がうまく遂行できないことに悩みながらも、粘り強く活動している方が多かったように思う。サモアの人々の思いを汲み取りながら協力隊としての自分の思いを伝える。そうやって信頼関係を築いていくことが活動する上で大切なのだと感じた。日本の人々が、熱意をもってサモアで活動していることがわかり、大変誇らしい気持ちになった。日本の子どもたちに、海外で一生懸命に協力隊として活動する人々がいることを伝えたいと強く感じた。報告会後は小グループに分かれ協力隊の方々と意見を交流することができた。一日を通し大変有意義な時間となった。

記 田中 陸人(石川県能美市立辰口中央小学校)





青年海外協力隊員たちと

SAMOAN HOSPITALITY

研修日 5日目/6日目 2018年8月18日、19日

訪 問 先 アウファガ村

アピアの市街地から10分も車を走らせれば、のんびりとしたココナッツのプランテーションや熱帯の森林が見られる。途中 に点在する村を眺めながら1時間半ほどかけてウポル島を縦断し、目的地のアウファガ村に着いた。

アウファガ村は、ウポル島南部にある、美しい海に面した村である。我々を出迎えてくれたのは、ホストファミリーを中心とする地元のご婦人方。昼食の後は、歌やダンスで交流した。夜も歌やダンスの歓迎の宴が行われ、心ゆくまでサモアンホスピタリティを楽しむことができた。

翌朝は、早朝から伝統の「ウム料理」の手伝い。ウム料理は男の仕事ということで、一家の男たちが揃って、ココナッツやタロイモの皮むきをやり、そして豚を締めたり…。実際に豚を締めるところを見たのは、もちろん生まれて初めての経験だったので、驚愕した。

日曜日ということで、その後は村の教会で礼拝に参加した。敬虔なクリスチャンであるサモア人の安息日に触れることができた。彼らは食事の前に必ず祈りを捧げる。文字通り、「あらゆる物の命をいただいて、そのおかげで自分たちが生きていることへの贖罪であり、感謝するための祈り」であることが、儀礼的なことだけではなく、実感として伝わってきて、たいへん有意義であった。

記 土井 聡 (富山県立富山中部高等学校)



海沿いの村でホームステイ



ホストファミリー宅 左にはサモアの伝統家屋ファレ



アウファガ村近郊の海



ご婦人方による歓迎のレセプション



村の子供たち

現地研修報告会

研修日	6日目 2018年8月20日
訪問先	JICAサモア事務所

最終日は、参加者がサモアで得た学びや、サモアが抱える課題を改善するための提言を発表しました。サモア事務所からは、所長をはじめ、今回の研修にご尽力下さったボランティア調整員の方々が参加して下さいました。

前半部分で、参加者は「サモアへの支援は本当に必要か?」という自分たちが抱いた問いの答えを発表しました。参加者は JICAボランティアの活動先やホームステイで得た経験から、サモアには美しい自然やおおらかな国民性など素晴らしい魅力 が沢山ある一方で、自然災害に弱い環境や、市民の意識改革が必要な健康(肥満)の問題、まだまだ未整備な医療体制、村の ルールに従うことが必要な酋長制度など、様々な課題が存在していることを理解し、その上で課題を改善させていくためには やはり今後も支援が必要だ、と結論付けました。

毎晩ディスカッションを行う中で、それぞれの分野に対して必要なアプローチが見えてきたことから、後半、参加者は実施の可能性がある支援を提案しました。ごみ焼却場の設置、職業訓練や起業支援を充実させること、企業と連携した防災教育、メディアを活用したサモアからの情報発信などでした。SDGs「持続可能な開発目標」の17ゴールとも関連させてあり、持続可能性を持つアプローチであるか、という視点からもよく議論されたことが伺えました。

最後に、田中所長とボランティア調整員の中埜さんから講評をいただきました。参加者からの提案に関しては、新鮮な視点で参考になったとお話しがありました。また参加者の非常に意欲的な取り組みにサモアの協力隊員たちも刺激を受けたとの評価をいただきました。また、帰国後は今回の経験を意欲的に教育現場に還元して欲しいとのエールもいただきました。

全行程を通し、参加された先生方の、教育に対する熱心な姿勢がとても印象的でした。今回のプログラムで得られたことを、ぜひ日本の教育現場へ継続的に還元し、またより多くの先生方と国際理解授業の実践についてやり方や内容を共有していって下さい。

記 竹本 沙織(JICA北陸 福井デスク)



JICAサモア事務所へのご挨拶



発表の様子